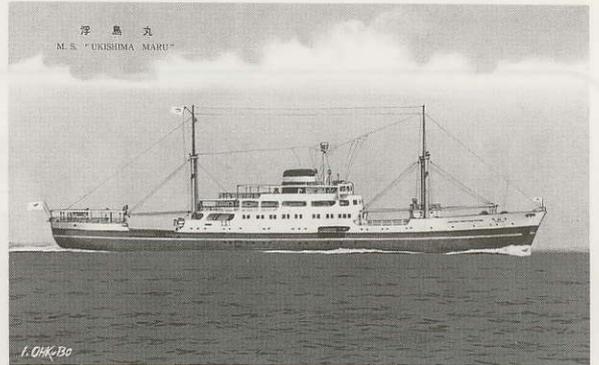


# 戦後の小笠原航路復興に 貢献した貨客船

文・山田廸生（日本海事史学会副会長）



浮島丸の絵葉書（大久保一郎画）



父島丸（東京港竹芝で筆者撮影）

## 父島丸

◀ 主要目 ▶ 貨客船。小笠原海運所有。総トン数（新造時）2,614トン、載貨重量トン数2,218トン。垂線間長82.5メートル、型幅13.7メートル。主機ディーゼル1基、最大出力3,150馬力、最高速力16.9ノット、航海速力14.5ノット。旅客定員622人。関西汽船の沖縄航路貨客船・浮島丸として1960（昭和35）年3月佐野安船渠で竣工。1973（昭和48）年3月小笠原海運が購入し父島丸と改名。翌月から東京～小笠原航路に就航。1979（昭和54）年4月台湾の長栄海運Evergreen Marine Corp. に売却され航海練習船・長練EVER TRAININGとなる。1984（昭和59）年高雄で解体

## 前身は沖縄航路の貨客船「浮島丸」

今年の夏、小笠原海運の東京～小笠原航路に3代目の「おがさわら丸」が登場する。総トン数1万1000トン。航海速度23・8ノット。父島までの航海時間を現行の25時間半から24時間に短縮する予定である。

小笠原航路は1876（明治9）年の三菱会社による開業以来、戦後の中断期をふくめ140年にわたる歴史がある。南南東へ片道1000kmという長い航海距離、「近海」という船舶安全法上の航路区分からみても、民営による異色の離島定期航路といえよう。

戦後、小笠原への民営航路を経営してきたのは小笠原海運である。1969（昭和44）年、近海郵船と東海汽船の折半出資により設立された。開業は1972（昭和47）年4月。第1便として就航したのは、東海汽船から用船した「椿丸」（1016総トン）である。

小笠原返還後の海上交通は、当初、東京都の用船運航によりおこなわれた。「椿丸」は当時から主力船であった。だが、同船は小型であり、敗戦後の資材不足のなかで建造された老齢船であった。スピードも遅い。

そこで、小笠原海運は開業の翌年（1973年）、より大きい自社船に代替することを決めた。関西汽船の貨客船「浮島丸」を9800万円で購入。「父島丸」と改名し、同年4月

4日東京竹芝発から小笠原航路に投入した。

関西汽船の「浮島丸」は、阪神～那覇航路の貨客船「那智丸」（1601総トン、1926年竣工）の代船として、1960（昭和35）年3月に佐野安船渠で建造された。

荒天航海時の耐波性を配慮して長船首楼型を採用。追い波の打ち込みを防ぐため船尾楼が設けられた（前頁の「浮島丸」の絵葉書参照）。ちなみに、後年、船楼間のウエル（凹部）は閉鎖され、両舷に船室が増設されている。中央甲板室の下層前面には、1等船客用のダイニングサロン（食堂）が配置された。その1層上にはラウンジが設けられた。

貨物関連では、1番船倉に青果物鮮度保持のため動力通風装置が備えられた。さらに、重量物の積載可能な10トンデリックを装備（2番倉口）。冷凍貨物倉も設けられた。

## 小笠原海運の最初の自社船「父島丸」

本格的な貨客船「父島丸」の登場により、小笠原の復興整備はいちだんと進んだ。

何よりも「父島丸」はスピードがはやかだった。航海速度は14・5ノット（「椿丸」は12・5ノット）。東京～父島の航海時間（片道）を38時間に短縮した。「椿丸」は44時間かかっていたのである。運航スケジュールは次のとおり。夏季には復航の父島発を日曜とし、観光客の利便をはかるため父島に2泊した。

（往航）東京竹芝発 水曜17時30分

小笠原父島着 金曜7時30分

（復航）小笠原父島発 土曜18時30分

東京竹芝着 月曜8時30分

「椿丸」は、発着曜日は同じだが、往航の竹芝発が午前、復航の竹芝着が午後であった。

旅客定員は「椿丸」の2倍以上あり、前述のように、建造当初から食堂が設けられていた。「椿丸」は客室の一部を充当し、運賃のほか、食事代として6食分1600円を徴収していたのである。「父島丸」では、食事代徴収をやめ、自由食とすることができた。

貨物倉容積は「椿丸」の3倍以上あった。沖縄航路時代からの冷凍貨物倉や10トンデリックは、小笠原航路でも有用であった。

残念ながら「父島丸」が小笠原航路で稼働したのは、1979（昭和54）年までの6年間である。思いのほか短い。もともと沖縄航路用に造られた船であるうえ、船齢が20年に近づき、早晚、小笠原航路に適した高速貨客船の新造が必要とみられていたのである。

小笠原航路初の新造船である初代「おがさわら丸」（3540総トン）がデビューしたのは1979年4月である。これにともなって撤退した「父島丸」は、世界屈指のコンテナ物流企業である台湾のエバーグリーン・マリンに売却され、航海練習船「長練Ever Training」として余生をおくった。